この言葉(3)

アフガニスタンの実体験において、確信できることがある。武力によってこの身が守られたことはなかった。防備は必ずしも武器によらない。

砂漠を緑に変えた、と言われる医師中村哲の著書『天、共に在り　アフガニスタン三十年の闘い』（2013 年、NHK 出版）の終章「日本の人々へ」からの一節だ。彼は続ける。「1992 年、ダラエヌール診療所が襲撃されたとき、『死んでも撃ち返すな』と、報復の応戦を引き止めたことで信頼の絆を得、(地元兵士は)後々まで私たちと事業を守った。戦場に身をさらした兵士なら、発砲しない方が勇気の要ることを知っている。」

中村が総院長を務める PMS（平和医療団・日本）はパキスタン国境にあるペシャワールを拠点とする医療団体で、アフガニスタン国内に 3 か所の診療所を持っていた。彼は九州大学医学部を卒業後、福岡で神経科医師として働き、その後、縁があってペシャワールの病院で 1984 年から 90 年まで 7 年間働いた。この赴任をきっかけに福岡で発足したペシャワール会は現在に至るまで、中村の活動を支援しつづけている。2013 年の時点で現地ワーカーを含む 3 名が専従、20 数名のボランティアだけで数億円の募金活動と事務処理を行なっている。会員数は公称 1 万 5 千名、実質募金者は年間 2 万名以上で、3 万部の会報を年に 4 回発行している。構成員の宗教的、政治的立場は様々である。

1984 年にペシャワールの病院に赴任した中村はハンセン病担当を申し出て、以来、設備も医療器具も薬もない、まるで「野戦病院」のような環境の中で彼の苦闘が始まった。切断手術に到るような傷の原因となるボロボロの履物を履いている患者を見て、彼はサンダル工房を病棟内に設け、靴職人を町から連れて来てサンダルを作らせて病人に配布し、以後、切断手術は激減する。この一件は、その後の中村の活動を象徴するものだと私は思う。つまり、病気を治療することだけを使命とする医師ではなく、病の根源となる環境、社会状況の改善に着手せざるを得ない彼の生き方を象徴する第一歩の出来事として。

1979 年にソ連が侵攻を開始して勃発したアフガン戦争は 1989 年のソ連軍撤退まで 11 年間も続いた。この間アフガン農村の約半数が打撃を受け、戦争の直接被害による死亡者は 75 万人、間接被害を入れると 200 万人が死亡、1985 年までにパキスタンに 270 万人、イランに 150 万人の大量難民が押しかけたと報告されている（本書より）。

難民キャンプで医療活動を始めた中村らはこうした状況のなかで「アフガニスタンの山村無医地区におけるモデル診療体制の確立」を目標に、精力的な活動に入った。アフガン戦争後、1992 年 7 月から 12 月までの間にパキスタンにいた 270 万人中 200 万人が殆ど独力で帰還している（国連難民高等弁務官事務所）。

1991 年 12 月にアフガン国内初のダラエヌール診療所が、翌年 12 月にダラエピーチ診療所が、そして 1994 年 4 月にワマ診療所が開設された。1998 年には現地活動 15 年をきっか

けとして、ペシャワールに 70 床の PMS 病院を設立、これによって日本側のペシャワール会が続く間はパキスタンとアフガニスタン両国における活動が可能となる。

2000 年春に中央アジア全体が大干ばつに見舞われ、アフガニスタンは未曽有の被害をこうむった。人口の半分以上、約 1200 万人が被災し、400 万人が飢餓線上にあり、100 万人が餓死線上にあった。これに加えて、タリバン勢力と反タリバン勢力が戦いを続ける中、「もう病気治療どころではない」と発心した中村は清潔な飲料水確保のため、井戸の発掘作業にとりかかる決心をする。病気の殆どは充分な食糧と清潔な水があれば、防げるとの判断からだ。ジャジャラバードに「PMS 水源対策事務所」が設けられ、日本人青年たちに加えて、タリバン、反タリバンを問わず、地元の人間も協力して井戸掘りを続け、2000 年 10 月までに 274 か所、2001 年 9 月までに 660 か所、2004 年には 1000 か所を超え、2006 年までに 1600 か所に達した。

次の目標はアフガン農村回復のための灌漑用水を得ることである。伝統的な灌漑用水路カレーズ(一種の横井戸)の復旧に始まった緑化が進む中、2001 年には「アルカイダ」討伐に向けて国連制裁が強化され、バーミヤンの仏像破壊が行なわれ、国際支援団体は次々と撤退し、9 月にニューヨークの同時多発テロ事件が起こった。

米英の「アフガン報復爆撃」主張に同調した日本政府は、10 月に「テロ特措法(テロ対策特別措置法)」を成立させて自衛隊派遣を決定し、イージス艦をインド洋に派遣した。10 月 13 日、中村は国会の衆議院特別委員会で話すことを求められ、干ばつの実態を伝えた。「観念の戦いは不毛である。平和は戦争以上に積極的な力でなければならぬ。緊急のアフガン問題は、政治や軍事問題ではない。パンと水の問題である。命の尊さこそ普遍的な事実である。」これが彼の主張だった。

2002 年 10 月 7 日、ジャジャラバードが空襲された。日本で報道されたピンポイント攻撃の実態は無差別爆撃で、一方的な殺人ゲームの様相を呈していたと言う。米軍の「タリバン掃討作戦」が激化する中、外国団体が路上で襲撃される事件が相次ぎ、PMS のダラエピーチ、ワマの診療所は一時撤退を余儀なくされる。彼らの用水路建設現場が機銃掃射を受けたこともあった。

「農村の回復なくしてアフガニスタンの再生なし」との確信を深めた中村は寄せられた「いのちの基金」6 億円を投じて農業復興に乗り出した。1)試験農場 2)飲料水源事業 3)灌漑用水事業の 3 本柱である。精神と気力だけが生きていた、と中村が語る 7 年間は大洪水、集中豪雨の天災以外にも米軍による誤射、地方軍閥の妨害、反米暴動、技師たちの脱走、裏切り、盗難、職員の汚職と不正、内部対立、対岸住民との争い、用地接収をめぐる地主との対立等々の人災にも見舞われた。中村自身、何度も絶望に陥ったが、無数の飢餓難民が水を渇望している、というまぎれもない事実が彼の希望を支えた。この間、ペシャワール会に寄せられた募金は年間 3 億円で、「これら無私の協力がなければ、用水路事業も成り立たなかったことは、特に強調しておかねばならない」と彼は述べている。

大規模な政治混乱を予感した中村は 2008 年 3 月に日本人ワーカー全員の帰国を決め、遅

くとも 12 月までに引き揚げることになった。ダラエヌールの診療所に常駐していた伊藤和也さんが拉致され、遺体となって発見されたのは 8 月 29 日のことである。この事件を伝えた日本の報道記事に見られる美談づくり、批判、世間への迎合に対して、中村は語る。「伊藤和也は伊藤和也以外に代わりができない。変哲もない人の子であり、かけがえのない一人の人間である。静かにしていただきたい。」

中村は「いっさいの煩いと感傷を絶ち、断固として用水路事業を完遂すること」を選んだ。次の言葉は彼の心境をもっとも的確に表現している。「復讐は神に任せる。」

幅 4 キロメートル、長さ 20 キロメートル、「死の谷」と言われるガンベリ砂漠灌漑が残されていた。それまでに働いた作業員の数は日本人ワーカーを含めて常時 400 名、多い時は 500 名を超えた。2008 年 11 月、日本人ワーカーが完全に引き揚げ、ガンベリ砂漠、砂防林植樹式が行なわれた。2009 年、選出されたオバマ大統領が「対テロ戦争の軸足をイラクからアフガニスタンに移す」と表明し、国際治安支援部隊の兵力が 12 万に増強された。中村たちの仕事にも支障が出たが、「非暴力が当方の絶対方針である」という態度を変えず、話し合いを重ね、無言の抵抗を示して用水路作業の続行を認めさせた。

次々と起こる難問を地道に解決しながら、人間業とは思えないほどの努力と試行錯誤を繰り返しながら、500 名の現地作業員と共にマルワリード用水路の最終地点ガンベリ砂漠での開通にこぎつけたのは、2009 年 8 月のことだった。2007 年 4 月に着工したマルワリード用水路の総延長は 24.8 キロメートル、分水路 16.7 キロメートル、灌漑面積 3120 ヘクタール、総工費 14 億円はすべてペシャワール会に寄せられた会費と募金によって賄われた。本書中、涸れ尽くした広大な土地や砂漠が緑をたたえた大地に変貌する姿をとらえた写真は私たち見る者を驚かせ、人間らしい喜びを与える。

私が中村哲の生き方に感動するのは、自分が選んだ道を踏み外さないところだ。彼は最初から他人を頼みとはしない。共にあるのは天のみだと信じている。多くの不条理な死を見てきたが、決して武力による復讐を認めない。ジャーナリズムの動向にはいっさい左右されない。ジャーナリズムが描き出す虚像に背を向けて、自身が信じる道を歩き続ける。

日本で起こった東日本大震災の報を追っているうち「置き去りにされたのはアフガニスタンだけではないと思った」と述べている。

「物騒な電力に頼り、不安と動揺が行き交う日本の世情を思うとき、他人事とは思えない。だが、暴力と虚偽で目先の利を守る時代は自滅しようとしている。今ほど切実に、自然と人間との関係が根底から問い直された時はなかった。決して希望なき時代ではない。大地を離れた人為の業に欺かれず、与えられた恵みを見出す努力が必要な時なのだ。それは、生存をかけた無限のフロンティアでもある。」

2017 年 5 月 4 日　扇千恵記